

夜の思索・時間/空間/音楽について二三の事柄

- 血と雫「空を瞬く」に寄せて -

October 1, 2013 / text : 川口トヨキ (BACTERIA)

夜に沈む海を眺めていると暗闇に落ちる空と海の境界線がふと消える瞬間がある。無限の奥行きを見せる宇宙が足下にまで波となり迫る恐れ。次第に起ち現れる無数の星のプラネタリウムと波のカーテンが凧となり頬を震める。

深淵の夜に辿り着いたこんなにも静かな世界で鳴り響くことを赦されたたったひとつの音楽かもしれない。

音楽は何の為に鳴り響くのか。この音楽は何処へ向かおうとしているのか。様々な音楽の至上命題が有り、尽きることはない。解答は至極簡単かもしれないし、正解は無いのかもしれない。

それでも音楽は鳴り続けなければならない。巷には要不要な音が散乱しており、その価値判断は人によって委ねられてはいるが、その数多有る音の中から限られた音と出会い、向き合い享受する事は価値ある邂逅となる。

血と雫。「空を瞬く」。前作とほぼ同じ環境で制作され、その全体像も総体的に前作を踏襲したサウンドプロダクトである。前作では緊張感を持ってその個々の存在感を際立たせていた、三人の織りなす音がやがて次第に互いを包み込むように変貌している。

現在進行形であるバンドの極自然の流れとして、各々の揺るぎない音同士が理解度を深めたのであろう。三者三様の別々の方向から中心に向かってブレの無い音が照射され、交錯した後にまた別の各々の方向へ放射される。

そこからそれぞれの音がゆっくりと次第に緩やかなカーブを描き、徐々にそのベクトルはひとつの円、空、グランドサークルを形成する。その空は荒れた暴風雨でなく緩やかな凧の如く且つ素朴で優しい、血の温もり、温度、暖かみを内包しているようだ。

それは心に潜む果てない内宇宙、深淵の闇の中、初めて気づき、知覚出来た自分の温もりなのかもしれない。

未来は今この瞬間、現在として訪れ、現在は物凄い速度で過去となる。その全ては一つに繋がるベクトルではある。だが、しかし。古代の時間論では無いが、現在を知覚することなしに過去も未来も無い。過去有りきの現在だが、過去もまた現在有りきなのだ。

だからこそ、現在を過去の記憶へ戻し懐古するのではなく、逆に記憶を現在に手繰り寄せることが重要となる。時間の速度。未来から過去へ過ぎ行く時間のラインの中、今この現在にこの音を掌中に収めるべきなのである。

この音との出会い、訪れ、"音"ずれ。どこか遠い空から訪れる微かな音を掴み取る。両手を広げ感情の触手が伸び上がらんとするばかりに、聴く者の心の空にもやがてこの音は必ず響き渡ることだろう。

歩き続けよう。この音と。今を。時間は自ら創造するものなのだから。